

# 明末黄檗禅師朝宗と琉球人蔡堅との交際について

福建師範大学 徐斌 計思宇 鐘晨

琉球史研究分野では琉球王国の仏教史についての研究成果が少なくないが<sup>1</sup>、これまで琉球と黄檗禅宗との間に明らかな交際関係が見られなかった。しかし、最近わが研究センターの研究員が中琉関係の資料と仏教典籍を整理する過程で、明末清初に琉球人が福建で黄檗禅宗の僧との交際があったと示した貴重な資料を発見した<sup>2</sup>。本文はこの史料の紹介と解説により、中琉歴史に関する情報と手がかりを整理していきたいと考えている。

## 一. 朝宗禅師と蔡堅

この史料は嘉興大蔵経の『朝宗禅師語録』から出ており、語録には崇禎末年琉球王国からの朝貢使蔡堅が朝宗禅師を訪ねて偈頌を求めたことが書いてある。『朝宗禅師語録』は康熙二十年(1681年)に完成され、朝宗大師の侍者の行導(別名「諾諾」)によって集めて整理されたものである。禅師の本名が陳通忍、常州(江蘇)毘陵人氏である。明万曆32年(1604年)に生まれ、22歳で剃髪して出家し、長生庵独知禅師と金粟寺密雲円悟禅師に禅を学び、密雲の法嗣である。通忍は号が朝宗で、浙江海塩靈佑寺を住持し、清順治5年(1648年)に示寂した。後世に朝宗通忍禅師と尊称された。<sup>3</sup>

朝宗は崇禎12年(1639年)に福建に入って遊歴し、福州にいる間に南禅院<sup>4</sup>に寄寓していた。後に朝宗は福清黄檗山萬福寺の隠元禅師の招きを受け、福清に赴き、「八月二十二日に入寺」<sup>5</sup>(訳文:)という。そして、諸僧のために開堂して仏法を説いた。隠元は密雲円悟に参禅し、後に円悟の弟子費隱通容に嗣法したことが知られている。というわけで、隠元は朝宗通忍の「法甥」と呼んでもいいだろう。<sup>6</sup>2ヵ月後、朝宗は再び萬福寺から遠くない靈石寺に向かった。語録には「崇禎己卯の冬に福清靈石寺からの招きを受け、十一月

<sup>1</sup> 可参见真境名安兴:《冲绳一千年史》,日本大学,1923年;名幸芳章:《冲绳佛教史》,护国寺,1968年;岛尻胜太郎:《冲绳外来宗教》,《冲绳县史》第5卷,各论篇4,文化1,冲绳县教育局,1975年;叶贯磨哉:《琉球の仏教》,《アジア仏教史,中国編VI,東アジア諸地域の仏教》,佼成出版社,1976年;知名定寛《古琉球王国と仏教—尚泰王尚徳尚眞の仏教政策を中心に—》,《南島史学》,56号,南島史学会,2000年。陈硕炫:《琉球佛教初探》,福建师范大学硕士学位论文,2005年。

<sup>2</sup> 该史料为福建师范大学闽台区域研究中心博士研究生李苇杭发现。

<sup>3</sup> 《贛州府志》,卷59,人物志,佛释篇。《朝宗禅師語録》,卷10,行状篇。

<sup>4</sup> 南禅院俗称南禅寺,在今南禅山边。始建于五代梁乾化年间(912年),为福州四大禅寺之一,是其中建寺最晚的一个。因寺中奉祀千尊佛像,故又名千佛南禅院。原寺毁于1917年台江特大火灾,解放初在原址上改建福州第14中学,如今仅剩“南禅山”的地名存在。

<sup>5</sup> 《朝宗禅師語録》,卷1,《住福州灵石禅院語録》篇,文中载:“崇禎己卯秋,师寓福建福州府福清县黄檗山,受请,八月廿二日入寺。”出自《嘉兴大藏经》第34册,台北:新文丰出版公司,1987年,第226页上。

<sup>6</sup> 《朝宗禅師語録》,卷1,《住海盐灵佑禅寺》篇,出自《嘉兴大藏经》第34册,台北:新文丰出版公司,1987年,第224页上。

二十四日に入寺」<sup>7</sup>とある。朝宗が靈石寺で開堂してからどのくらいの時間が経ったかは知られていないが、要するに、翌年(1640年)に朝宗は福清を離れて福州南禅院に戻り、建寧府を經由して北上し、浙江に帰る予定であった。<sup>8</sup>これも通忍和尚と福清黄檗万福寺との因縁でもあろう。興味深いことに、禪師語録第9巻には彼が琉球人のために作った12題15首の偈語が収録されている。発見された偈語は明朝末の中琉友好交流の歴史を研究する資料として価値があると考えられる。全文は下記通り：

**(1)琉球国蔡堅大夫参索布袋、南泉、赵州像，师手指上下，大夫不领。书偈二首以示**

「琉球国蔡堅大夫が布袋、南泉、趙州3名の祖師画像を前に坐禅している時、大師は指で上下を指すが大夫が悟らない。そして大師は二首の偈頌を持って示された」

①布袋南泉与赵州，指天指地为君酬，分明三祖一时现，何用茫茫更别求。

②觜体示君君不烛，犹觅丹青描数轴，纵然描得十分成，错过自家真面目。

**(2)为琉球中山王（二首蔡大夫请）**

「琉球中山王のため（以下の二首は蔡大夫の要求による）」

①人王尊与法王尊，在在何曾昧己真，昔日赵州年老迈，尽将家计一时陈。

②从来个事无差别，贵贱咸须据本因，珍重琉球贤国主，莫忘自利利诸人。

**(3)为琉球金武王子**

「琉球金武王子のため」

生在王家，天然尊贵，玉叶金枝，文经武纬；

巍巍堂堂，了无忌讳，面目本如，请勿自昧。

**(4)示琉球蔡大夫法名行圆（号即中）**

「琉球蔡大夫に行円の法名と即中の号を与え」

圆觉自性，空假即中，如珠在盘，八面玲珑；

千差万别，一脉灵通，勿从他觅，尽在尔躬。

**(5)示琉球毛大夫法名行觉（号本得）**

「琉球毛大夫に行覚の法名と本得の号を与え」

自觉觉他，别无奇特，一念回光，便同本得；

公其觉之，直下勿惑，本自不迷，得亦无得。

**(6)示琉球阮大夫法名行香（号普薰）**

「琉球阮大夫に行香の法名と普薰の号を与え」

尽大地人，同一鼻根，行香一片，法界普薰；

<sup>7</sup> 《朝宗禅师语录》，卷1，《住福州灵石禅院语录》篇，文中载：“崇祯己卯秋，师寓福建福州府福清县黄檗山，受请，八月廿二日入寺。”出自《嘉兴大藏经》第34册，台北：新文丰出版公司，1987年，第226页上。

<sup>8</sup> 《朝宗禅师语录》，卷2，上堂篇，出自《嘉兴大藏经》第34册，台北：新文丰出版公司，1987年。

谁言证得圆通门，直下毫无气息存。

### (7)布袋和尚(已下七赞琉球国蔡大夫请)

「布袋和尚（以下七首の賛詩は琉球国蔡堅大夫が請ったもの）」

杖头挂木屐，草鞋平地立，袋口撮不开，遇物便求乞。

满脸笑相迎，行藏无定迹，知你是凡是圣，是魔是佛。

十字街头(等个)人，自己不知先着贼。

### (8)南泉祖师斩猫像(二首)

「南泉祖師斬猫の画像（二首）」

①正令全提，杀活在手，一刀两断，阿谁知有。

人人都道未举以前斩却以后，不知当面成过咎，太平时节莫颠预，一一面南看北斗。

②威仪不缺，戒律不持，手执利刃，身搭伽黎；

是粗是细，有眼皆知，闻说刚刀不斩无罪，何须卖弄死猫头儿。

### (9)赵州祖师

「趙州祖師」

危坐竟日，禅道不谈，将谓出人头地，谁知老迈不堪，

若不是手里有些把柄，如何掩得者满面羞惭，借问庭前柏树子，何似前三与后三。

### (10)临济祖师(适有访不晤)

「臨濟祖師（偶々、客が来訪しているので蔡堅に面会できず）」

三年不鸣，一鸣惊人，自遭三顿毒，到处害丛林。

黄河水自源头浊，惹得后代儿孙如狮子游行，直入狐狼野干之窟，不动声色而已。

大惊小怪，藏窟无门。咦！夫是之谓，道出常情。

### (11)天童老和尚

「天童老和尚」

桐棺山顶曾开眼，太白峰前瞎了休，最有一般奇特处，从来棒棒打人头。

### (12)又(琉球国蔡大夫请归国供养)

「又、琉球国蔡大夫が帰国して供養するため、偈頌を請う」

行棒不动手，说法不开口，漫云临济孙，岂落瞿昙后。

未移蛙步入闽山，不起于座藏北斗，问渠端的是何人，报道琉球国里有。<sup>9</sup>

上から分かるように、朝宗は福建で3人の琉球人に会い、それぞれ蔡堅大夫、毛大夫、阮大夫であった。3人が朝宗禅師のそばで禅を学んでいた。禅師は彼らに座禅をさせながら布袋、南泉、趙州という中国歴史上の三人の高僧画像を見学させた。残念ながら朝宗大

<sup>9</sup>（侍者）行导编：《朝宗禅师语录（10卷）》，卷9〈杂偈〉，《嘉兴大藏经》，第34册，台北：新文丰出版公司，1987年，第271页下～273页上。

師がそばで「指を上下に振らせる」教示しても、この3人はなかなか悟ることができなかった。そこで、朝宗は偈語を2首書いて彼らに贈った。それに、3人に法名と法号を与えただけでなく、相応の偈頌を書いてあげた。また、蔡堅は琉球国王と世子の2人のために偈頌を3首求め、本人は「帰国供養」のために偈頌を10首求めた。では、蔡堅一行と朝宗禅師との面会はいつ、どこだろう。黄檗山萬福寺、それとも靈石禅寺なのか。これらの質問にどう答えればいいのかさらに考えるべきである。

## 二. 琉球史料に記載された蔡堅

明清時代の琉球人の来華状況については、両国の文献に詳しく記載されている。文献は中国の明実録、清実録などの宮に所蔵された文書だけでなく、琉球側の外交文書「歴代宝案」、「中山世鑑」、「中山世譜」、「球陽」などの正史資料も含まれている。また、数が多い琉球士族の家系図（琉球家譜）は古代琉球、近世琉球と中国、江戸幕府、薩摩の関係を調べる最初の資料として価値があると考えられる。上記文献の照合により、蔡堅一行の来華活動の基本状況を知ることができよう。

久米村蔡氏家系図によると、蔡堅（喜友名親方）は久米村蔡氏9世で、通事・都通事・座敷・正議大夫や紫金大夫などを歴任した<sup>10</sup>。生涯に使節として中国に派遣されたのは6回あり、特に1609年に琉球が薩摩に侵攻されて困難な時期に陥った前後、王府のために多くの困難な外交任務を果たし、尚寧、尚豊の二代の王から高く評価された。崇禎11年（1638年）紫金大夫であった蔡堅が来華進貢を命じられたのは6回目であった。使節団の主要メンバーには副使毛継善、都通事阮士乾一行がいる。それぞれ前述の蔡大夫、毛大夫、阮大夫である。彼らは2隻で編成された進貢船に乗って福州に着き<sup>11</sup>、定期的に朝貢品を献上するほか、国王からの中国朝廷に福州港で「納税し白糸を買い付ける」<sup>12</sup>権限を求めるという任務を帯びている。琉球進貢船は11月に那覇を出航し、1週間後に福州港に到着した。一行は福州の琉球館（柔遠駅とも呼ばれる）に落ち着いた後、半年間の商業貿易活動と文化交流を展開した。翌年（1639年）の旧暦8月、正副使節蔡堅、毛継善は主な随員と貢物を率いて福州を離れ、水陸兼行で北上して上京した。彼らはその年の冬至前に都に入り、冬至と来年の正月に中国皇帝謁見の式典に参加し、朝貢品の献上の外交任務を履行しなければならなかった。今回の参勤では、蔡堅一行は崇禎皇帝に琉球人が中国で定額白糸を購入して納税することを許可する権力を得ようと努力し、王の引き継ぎの任務を順調に遂行した。また崇禎13年（1640年）2月に北京を発って、元の道を折り返し、4月に福州に戻

<sup>10</sup>紫金大夫一職官爵从二品，为久米村士族人士出任的最高职位。参见蔡铎、蔡应瑞、程顺则：《琉球国中山王府官制》，康熙四十五年（1706年）。

<sup>11</sup>《历代宝案》，卷33-18，「琉球国中山王尚 为进贡事崇禎十一年十月二十日给执照」；蔡温：《中山世谱》卷8之9，冲绳县教育委员会，昭和61年（1986年），第94页。

<sup>12</sup>《历代宝案》，卷13-16，「崇禎十一年十月二十日琉球国中山王臣尚丰谨奏为天循例効顺输税再赐议处事」。

り<sup>13</sup>、東南季節風の便で出航して帰国する予定であった。

家譜の情報からすると、疑問が生じる。なぜなら、蔡堅一行が福州を発って北上して上京したのは1639年の旧暦8月で、翌年(1640年)4月まで福州に戻っていなかった。そして、通忍禅師はちょうど同じ時点で隠元和尚の招きに応じて、黄檗山萬福寺と靈石寺に入り、半年以上も仏法を説いたからだった。二人はちょうど中国の南北にいたため、会うことができないと考えられる。双方が会うことが可能な時点が二つあり、しかも、場所は福州である可能性が高い。一つ目の時点は1639年8月まで、つまり蔡堅が琉球館で福建布政司と協力して朝貢事務の仕事进行处理していた半年間であり、そして二つ目は1640年4月に琉球人が北京から福州に戻り、帰国の準備をするまでのある時間だとして考えられない。ここで説明しなければならないのは、両国の歴史文献と関連研究成果を総合して、琉球使節が中国に滞在している間に福州府を離れて福清県に行った事例はまだ発見されていないことである。したがって、琉球大夫3人が黄檗山萬福寺を訪れたことはないことが確信できる。彼らが通忍和尚を訪れたのは1640年4月以降で、具体的な場所は通忍大師が2度寄寓した南禅寺である可能性が高いと考えられる。なぜなら、上記の抜粋した12首目の偈佗には「琉球国の蔡大夫が帰国し供養しよう」というケースがあり、ちょうどこの時琉球人が帰国の準備をしていたことを裏付けている証となる。しかも南禅寺も双方が会談して禅を交流するのに最適な場所である。

### 三. 結語

以上のことから、朝宗禅師と琉球紫金大夫蔡堅が福建で交流していた状況の脈絡を大まかに理解した。しかし、まだいくつかの問題と疑問点が残っている。例えば、その一つ目は蔡堅たちはなぜ朝宗禅師を選んだのか。当時の福州には有名な寺院や高僧がたくさんいた。実際に、清代において福州にいた琉球人が鼓山涌泉寺によく遊歴していたことを示す資料がある。なぜ蔡堅は涌泉寺の僧に偈を求めなかったのか。その二つ目は琉球人はどのようなルートで通忍大師が福州にいるのを知り、そして連絡を取ったのか。その三つ目は、双方の今回の出会いは単なる偶然ではないだろうか。琉球人が黄檗高僧と交流し、偈讚を求めた事例は、中琉交流史では異例であり、さらなる考察に値する。

---

#### 執筆者紹介

徐 斌：福建師範大学閩台区域研究センター 副研究員、中琉関係研究所研究員。

計思宇：福建師範大学閩台区域研究センター大学院研究生

鐘 晨：福建師範大学外国語学院大学院研究生

---

<sup>13</sup> 久米村系《蔡氏家譜（儀間家）》，《那霸市史資料篇》第1巻，6，那霸市企画部市史編集室，1980年，第260頁。